

洋13-99

「ローン・レンジャー」

2013(平成25)年8月24日鑑賞<TOHOシネマズ梅田>

監督：ゴア・ヴァービンスキー
ジョン・リード（正義のヒーロー、ローン・レンジャー検事）／アーミー・ハマー
トント（復讐に燃える悪靈ハンター）／ジョニー・デップ
ブッチ・キャヴェンディッシュ（冷酷な無法者）／ウィリアム・フィクトナー
レベッカ・リード（ダン・リードの妻）／ルース・ウィルソン
ダン・リード（ジョン・リードの兄、テキサス・レンジャー）／ジェームズ・バッジ・デール
ダニー・リード（ダン・リードの息子）／ブライアン・プリンス
レイサム・コール（世界の果てまで支配する鉄道王）／トム・ウィルキンソン
レッド・ハリントン（義足に銃を仕込んだ謎の女性、興行小屋の女主人）／ヘレナ・ボナム=カーター
2013年・アメリカ映画・150分
配給／ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン

<「スーパーマン」には及ばなかったが・・・>

本件のパンフレットには、「『ローン・レンジャー』エンサイクロペディア」のページがある。エンサイクロペディアとは百科事典のこと。そこには、①オリジナルは80年前に作られた、②トントの登場、③TVドラマ「ローン・レンジャー」等の紹介に続いて、「TV『ローン・レンジャー』の日本での反響」という項目があり、TV『ローン・レンジャー』が「日本では1958年8月2日からKRT（現在のTBS）で53話、さらに59年9月7日から5年間に亘ってフジテレビで（再放送を含め）放映された」と書かれている。また、「TVの普及率がまだ10%強という当時の日本では、アメリカ製のドラマが大人気。そのなかで『スーパーマン』『名犬リンチング』などには視聴率で及ばなかったものの、『ローン・レンジャー』も人気を集め、劇中のセリフ『キモサベ』『ハイヨー、シルバー！』『インディアン、嘘つかない』などが子供たちの流行語として一世を風靡した」と書かれている。

たしかに、今から50年以上前の私が小学生だった時代、テレビの普及率10%という時代の中で、私は「キモサベ」は覚えていないが「ハイヨー、シルバー！」と「インディアン、嘘つかない」のセリフは今でもはっきり覚えている。

ちなみに、近時はTBSのTVドラマ『半沢直樹』が大人気で、8月25日放送分は32.8%の視聴率をたたき出し、『家政婦のミタ（最終回 36.4%）』以来のブームになっている。そこで最大の決めゼリフは「やられたらやり返す、倍返しだ！」というもので、今年の流行語大賞の有力候補N0.1になっている。しかし、仮にそれが今年の流行語大賞に選ばれたとしても、これから50年以上生き残ることはないだろう。そう考えると、「ローン・レンジャー」という素材の素晴らしさを、あらためて再認識！

<ふつうは絶妙コンビだが、本作のコンビは？>

日本でもアメリカでも「コンビもの」の名作は多い。さしづめ日本なら、古くは勝新太郎と田宮二郎が名コンビぶりを発揮した『悪名』シリーズ、最近では私立探偵と助手の高田の『探偵はB A Rにいる』シリーズなど。アメリカなら、古くは『ナポレオン・ソロ』におけるナポレオン・ソロとイリヤ・クリヤキン。しかして、本作にみる“聖なる力”を操る悪靈ハンターであるトント（ジョニー・デップ）と、正義と法を守る検事から孤高のレンジャー＝ローン・レンジャーに転じたジョン・リード（アーミー・ハマー）のコンビは？

「ハイヨー、シルバー！」のセリフと、ビーと口笛を鳴らせば駆け寄ってくる白馬、そして両目についた黒マスクといえば、中年の人なら「怪傑ゾロ」を、黒マスクだけなら、若い人は「バットマン」を思い出すのでは？本作でジョンがなぜ黒マスクをつけ、なぜ白馬にまたがるのかはあなたの目で確認してもらいたいが、トントの目から見ると、トントも尊敬していた比類なきテキサス・レンジャーであった兄のダン・リード（ジェームズ・バッジ・デール）ではなく、正義と法ばかりをぶりかざし、銃を持つことはおろか銃を撃つことすらも拒否する弟のジョン・リードを、「聖なる白馬」がなぜ「あの世」から甦らせたのかが不思議で納得いかないらしい。「この馬はバカか！」とまで悪態をついていたほどだから、よほどトントにはこの選択が気に入らなかったようだ。現にストーリー展開をみていても、中盤以降トントとジョンは助け合うシーンも多いが、ケンカ別れするシーンもしばしばある。ふつうは絶妙コンビなのに、本作におけるこのコンビは、これで本当に大丈夫・・・？

<坂本竜馬の時代に、アメリカではこんな鉄道が！>

北辰一刀流の免許皆伝の腕前だった坂本竜馬がアメリカの拳銃を好んだのは意外だが、竜馬がアメリカでは將軍様を入れで選ぶことや、庶民がブーツを履いていることに衝撃を受けたことは、竜馬を主人公としたTVドラマでよく描かれている。幕臣だった勝海舟と同じように「新しいもの好き」だった竜馬は、暗殺のターゲットであった勝の魅力にひかれて一転してその弟子となり、勝海舟が開いた海軍練習所で航海術を学び、亀山社中を作つて大活躍した。それが1853年のペリー来航による黒船騒動から1868年に明治政府が成立するまでの日本の幕末の動きだが、さてその時代にアメリカは？

アメリカがイギリスとの独立戦争を戦ったのは1775年～1783年。そして『風と共に去りぬ』（39年）で描かれた南北戦争が1861年～1865年。しかして、本作で描かれるのは1869年、日本では明治政府が成立した年の翌年だ。本作の主人公はトントとローン・レンジャーの2人だが、映画冒頭にはアメリカ東部の大都会で法律を学び、若き検事となったジョン・リードが8年ぶりに列車に乗って開拓者が多く住む故郷のコルビーに戻るシーンが描かれる。この同じ列車で護送されていたのが、悪靈ハンターであるトントと、絞首刑になる運命の無法者、ブッチ・キャヴェンディッシュ（ウィリアム・フィクトナー）だ。『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズのスタッフが贈るエンタメ大作たる本作最初の見どころが、そこで列車の大暴走シーンと2人が見せるアクションだ。それはそれとして大いに楽しめばいいのだが、私がここで注目したいのは、明治政府が成立した翌年の1869年にアメリカではすでに、東部と西部を結ぶ大陸横断鉄道が開通していたという驚くべき事実だ。

西部開拓史と、これに伴う原住民（インディアン）との戦いは多くの西部劇で描かれているが、それと並行して鉄道事業に意欲を燃やした先見の明のある事業家がいたことに注目したい。本作にみる鉄道王レイサム・コール（トム・ウィルキンソン）が抱く夢は、必ずしもキレイごとだけではないところがミソだが、1869年という時代における日米のそんな違いに注目したい。ちなみに、あの当時のアメリカの鉄道の夢に並ぶのが、現在のITの進歩や宇宙への夢だろうが、この分野でアメリカに対抗できる日本人は、ソフトバンクの孫正義、楽天の三木谷浩史、そして今やつぶれてしまったが、ロケット開発に今なお意欲を燃やすホリエモンこと堀江貴文くらい・・・？

<本作にみるコマンチ族は？>

最近北海道旅行づいている私は、北海道がもともとアイヌ民族の国であったこと、北海道開拓史とは、明治維新以降日本人がそれを武力で征服してきた歴史であることを改めて認識した。それと同じように、ゴールドラッシュと西部開拓史をキーワードとするアメリカ建国史は、イギリスから移住してきた白人＝キリスト教徒が、原住民＝インディアンを武力で征服してきた歴史であることを本作を観て再確認。ジョン・ウェン全盛時代のアメリカ西部劇では原住民はアパッチ族が多かったように記憶しているが、本作のそれはコマンチ族だ。少年だった頃、「川の始まるところ」にある銀のことをトントが2人の白人に語ったことから、コマンチ族に大きな悲劇が・・・。トントはそんな「過去の重荷」を背負って今を生きているわけだが、本作のクライマックスに至ってやっと、そんなトントの復讐の対象が誰であったかが明らかにされるので、それに注目！

他方、1869年の今、コルビーの町の近くに住むコマンチ族は白人との「協定」を守つて「川の向こう側」に住んでいたが、ある日、その協定を破つてコルビーの町に攻め込んだから大変。彼らは、ダン・リードの家を守つていた妻のレベッカ・リード（ルース・ウィルソン）、7歳の一人息子ダニー・リード（ブライアント・プリンス）らを拉致していくが、コマンチ族はなぜそんな無法者？抑圧される少数民族の姿を見るのはつらいが、さて本作にみるコマンチ族の生き様は・・・？

<正義は法で？それとも銃で？>

列車に乗つて東部の大都會から故郷のコルビーに戻つてきた理想に燃えた若き検事、ジョン・リード。そして、列車からまんまと逃走した無法者ブッチを追つたため、兄のダンから名譽あるテキサス・レンジャーに任命されながら、銃は持たない、撃たないに固執するジョン・リード。本作前半ではそんなジョンの正義感が顕著だが、8名のテキサス・レンジャーが、その中の1人の裏切りによって全滅（？）させられてしまうと、ジョンの言つた「正義」って一体何だったの？と思つてしまつ。

時あたかも今の日本では、憲法解釈の変更を見据えた「集団的自衛権」をめぐる論争が始まろうとしているが、本作を観ているとその論点は全く同じだ。ブッチのような凶悪犯は自分で言つており情け容赦がないから、追っ手となつていただんやジョンなどのテキサス・レンジャーは無惨に全滅させられ、それをトントが葬つたわけだ。それで終わつてしまえば、「悪徳の栄え」になつてしまつわけだが、本当はありえない本作の面白さは、トントがそんなジョンをあの世から呼び戻したことだ。ジョンが黒いマスクをしているのは、そうすれば死んだはずのジョンだとわからないから、というトントのアイデアだが、生き返つたジョンは前と同じように正義はあくまで法で実現しようとするの？それとも銃で？

ブッチとの死闘の末やつとブッチを殺せる場面が到来する中、なお法の裁きを受けさせるため、ジョンがブッチを故郷まで連れ戻すシーンはある意味で感動的だが、さてその効用は？中国では8月22日から薄熙來被告の裁判が山東省済南市の済南中級人民法院（地方裁判所）で始まり、これが中国版ツイッターである微博（ウェイボー）で公開されるという異例の事態になっているが、これは中国での法の正義を見せつけるため？しかして、本作にみるブッチの裁きはいかに？そして正義は法で？それとも銃で？

<真の敵はダレ？政官財の癒着構造は？>

薄熙來の失脚とその裁判の本質は、一言でいえば中国共産党内部の権力闘争と腐敗。他方、近時の人気ドラマ『半沢直樹』は、銀行内部の権力闘争と腐敗ぶりが見事に描かれている。半沢融資課長に西大阪スチールの東田社長へのいい加減な5億円の融資を実行させたあげく、その焦げつきの責任を取らせようとしたのは、東京中央銀行大阪西支店長の浅野だが、何とその浅野支店長と東田社長は小学生時代の同級生でつるんでいた・・・？さらに、5億円の倍返しに成功して東京中央銀行本部の営業第二部次長に出世した半沢が次のターゲットにしたのは、町工場を経営していた笑福亭鶴瓶演じる父親を自殺に追いやつた香川照之演ずる東京中央銀行本社の大和田常務だが、その復讐の可否は？そんな視点で、本作の真の敵は？を考えると、いろいろな共通点があることに気付くはずだ。

また、『金融腐蝕列島 呪縛』（97年）では政官財の癒着が顕著だったし、薄熙來裁判でも中国共産党の幹部や政府の官僚と民間企業との癒着が顕著だが、1869年のアメリカにおける政官財の癒着構造は？その主役は鉄道王のレイサム・コールだが、彼は株式会社の株主たちからいかにして「同意」をとりつけるの？また、表面上はコマンチ族との融和を解く彼が、裏ではコマンチ族に対してどんな仕打ちを？そして、そんな裏の仕事、闇の仕事をやらせるため、彼はどんな闇勢力を利用しているの？さらに彼は、当時の政府軍ともいべき「騎兵隊」とどんな良好な関係を結び、待遇しているの？

1868年に明治政府が成立するまでの幕末時代における権力闘争も興味深いが、大陸横断鉄道が開通した1869年という時代における、鉄道王レイサム・コールを軸とした政官財の癒着構造にも大いに注目したい。

<頭を空っぽにして楽しんでもOKだが・・・>

私は本作を劇場で観たが、観客は若いアベックが多かった。私の隣に座つたアベックは例によつて（？）大きなポップコーンを食べながら映画鑑賞だ。本編開始前、予告編上映中に時々聞こえてくるこの2人の会話を聞いていて、「こいつらアホか」と思う内容ばかり。また、トントを中心に時々みせる本作のギャグに彼らはすぐに大きな笑いで反応。そんなアベックや、その他大勢のアベックには、ここで私が書いた評論には全く関心がないだろう。

それはそれで仕方ない。本作は別にここに書いたような視点で考えるべき映画ではなく、『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズと同じように、単純に楽しめばいいだけのエンタメ巨編なのだから。私もそれは否定しないが、そんな楽しみ方のままで日本があと10年～20年続ければ、きっと日本は尖閣諸島のみならず、沖縄も中国の領土もしくは自治州に・・・？さらに、あと50年もすれば、九州の日本人はみんな本作に見たコマンチ族と同じように・・・？まあ、その時にはどうせ私は死んでいるから、関係ないことだが・・・。

2013(平成25)年8月28日記